

■白糠高校入学者数

（単位：人）

	卒業生数			入学者数					地元進学率
	白糠中	庶路中	茶路中	白糠中	庶路中	茶路中	町外	計	
令和3年度	30	14	1	11	2	1	8	22	31.1%
令和2年度	30	27	2	7	6	0	11	24	22.0%
令和元年度	35	17	5	18	2	1	13	34	36.8%
平成30年度	38	25	1	12	9	0	24	45	32.8%
平成29年度	33	31	6	11	4	0	14	29	21.4%



上) 放課後に久遠塾で学習する生徒たち。下) 久遠塾スタッフの柴澤大夢さん(左)と中川雄貴さん(右)。

町は高校存続のためには『学力の向上』が必要という基本的な考えがありました。実際に学力は上がったのでしょうか。

上内さん 何を持って学力が上がったと判断するのかは、非常に難しいと思います。大学への進学率や大学のネームバリューで判断するだとか、そういうことではなく、大切なのは、高校が生徒たちの希望や目標がかなえられる場所にあるということです。白糠高校は魅力化プロジェクトに取り組んで、確実に変わってきているので、こ

れからさらに良くなっていくと思います。

——人口減少により、子どもたちの数も減っています。今年度からは学年1問口募集になりました。町外から生徒を呼び込まなければ、現実的に学校の存続は厳しいのではないのでしょうか。

上内さん 町でも「子育て応援日本一」を掲げ、幼児教育から義務教育学校まで手厚い教育環境を整えています。町に高校がないとなると、やはり魅力は半減してし

上内さん 今は生徒たちの希望するさまざまな進路に対応できる体制が整っており、しかも個別指導が可能だということをアピールポイントにしていきたいと思っています。そして、道立校である白糠高校と町とが手を組んで、魅力化プロジェクトに取り組んでいきますから、これは目には見えないけれど、すごく大きな力になっていきます。我々は魅力化プロジェクトで学校を存続していくんだという強い気持ちを持ってやっています。

まいます。現実的に厳しいのは理解していますが、将来ビジョンを見ないまま、数合わせで高校を存続させても意味がなく、本当に魅力ある学校にはならないと思うのです。今が踏ん張りどころで、町民が一丸となって生徒を育む、魅力のある高校をつくっていくときだと思っています。

田村校長 町外の生徒を呼び込むよりも、まずは町内の子どもたちに白糠高校のことをよく知ってもらう、地元進学率を上げることが先決です。今は校舎内に白糠中学生がいますので、高校のことを知ってもらういい機会だと思っています。

——魅力化プロジェクトにより先生方の意識もだいぶ変わってきたのではないのでしょうか。

上内さん そうですね、先ほど校長先生がおっしゃっていたように、目的意識を持った生徒は、集中して授業を受け、先生方いろいろな質問をするなど、一生懸命に取り組んでいます。生徒がそういう姿勢だと、先生方もそれに応えようと思います。先生方が熱心になると、生徒もそれについていこうと

頑張ります。今はとてもいい循環になっていると思うんです。

田村校長 数年前までは白糠高校といえば『生徒指導困難校』と言われ、中途退学する生徒もおり、先生方も大変な思いをしてきたと思うんです。それが今では生徒指導事故は極端に減り、今年是一件もありません。実際に授業を見てもらえば分かると思うのですが、残念ながら今は新型コロナウイルスにより難しいので、コロナが落ち着いたら町民の皆さんにも学校へ来ていただいで、生徒や学校の様子を見てもらえればと思います。いずれはコンソーシアムを作りたいと思っています。コンソーシアムとは、簡単にいうと学校を応援する「応援団」のような組織です。生徒を育てるのは学校だけではなく、地域と一体となって育んでいくという考えです。生徒たちは地域とのつながりを通して、多くの人の関わりや経験を重ねることで、より成長していくことができると思うのです。

——中学校を卒業する生徒たちが白糠高校を進学先に選択しないのはどうしてだと思いませんか。

上内さん 白糠高校では夢や目標が実現できないかと思っている方が多いと思うんです。学力の高い大学へは行けないだとか、部活動ができないだとか。たとえば『医者になりたい』というのであれば、白糠高校に専門の科目はありませんが、それをフォローできる体制はあるんです。魅力化プロジェクトに取り組む中で、不安材料はなくなっているんです。

田村校長 部活動ですが、バドミントンなどはチャンドラさんが指導してくださって、白糠高校でも十年ぶりに全道大会へ出場することができました。中学校でも団体

——魅力化プロジェクトの当初、女子が何年かぶりに優勝しましたよね。地域に指導者がいれば、どんな部活動でもできるんですよ。

上内さん 部活動を指導できる先生の数は限られていますから、あれもこれもというのは、先生方だけでは無理なんです。ですが、たとえば柔道やバレーボールを指導されている方が『高校生も一緒に指導しますよ』となれば、一人でも白糠高校の名前で大会に出ることは十分可能なんです。そういった地域の方の支援も魅力化プロジェクトの一つになりますよね。

塾の先生との連携が取りやすくなったということ。連携が取れることで、たとえば英語の授業などは、塾の先生にサポートという形で教室に入ってもらっています。このことにより生徒一人一人に細かな指導ができますし、効率よく授業ができています。

——魅力化プロジェクトにより先生方の意識もだいぶ変わってきたのではないのでしょうか。

上内さん これは高校の中に塾があるからできることなんです。先生方と塾の先生とが、密に連携がとれる環境でなければできません。ほかにも塾を校舎内に移設したことで計り知れない効果が期待できます。今後は楽しみながら大きな改革だっただと私は思っています。



7月8日、3年生の生徒に起業への関心を高めようことを目的とした「ビジネスプランを作成する授業」が白糠高校で行われました。

同校では、今年開かれる「第9回創造力、無限大∞高校生ビジネスプラン・グランプリ」への参加を目指しています。授業では、グランプリを主催する日本政策金融公庫の今野慈彦さんを講師に招き、ビジネスの心構えやアイデアを生み出す発想方法などを学びました。3年生25人は3～4人のグループごとにビジネスプランを作成し、校内で選ばれたチームが同グランプリにエントリーします。同校では、大地みらい信用金庫等が主催する釧路・根室管内の高校生を対象にしたビジネスコンペティションにも参加を予定しています。